



『海道東征』の出版譜をめぐる諸問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2016-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5911

『海道東征』の出版譜をめぐる諸問題

浦 雄一

Considerations on the Published Score of Kiyoshi Nobutoki's Cantata *Kaidō Tōsei*

Yuichi URA

1. はじめに

『海道東征』は東京音楽学校教授などを務めた作曲家、信時潔（1887-1965）によって書かれた、我が国における西洋音楽史上初の本格的なカンタータである¹。1940年に発表され、戦時中は一定の演奏機会があったが、皇紀2600年奉祝曲として作曲された経緯や、信時が当時の愛唱歌「海ゆかば」の作曲者でもあることなどが原因で、戦後は演奏回数が激減した。しかし近年、作曲家の重要性および『海道東征』の歴史的・音楽的価値が再考され、「信時潔ルネサンス」とも呼ぶべき現象が起きており²、本作品の演奏機会も徐々に増えつつある。

筆者は、2015年11月20日および22日にザ・シンフォニーホール（大阪市）で行われた『海道東征』の公演³において副指揮者を務め、事前にこの作品を演奏する際の譜面上の問題について検討した。本稿ではその検討結果を各章ごとに報告し、実際に採用された解決案を示す。

2. 楽譜について

現在一般に入手可能な唯一の楽譜は、作曲者の孫で音楽学者である信時裕子氏が2009年に発行したヴォーカルスコアとフルスコアの複製版である。オリジナルは、ヴォーカルスコアが1940年発行/1941年再版、フルスコアが1943年発行となっている⁴。今回の公演においても、このフルスコアを使用した。

¹ 詩は北原白秋（1885-1942）による。

² 新保祐司氏（都留文科大学教授）のプレトークにおける発言（2015年11月20日）。

³ 北原幸男氏指揮、大阪フィルハーモニー交響楽団。

⁴ いずれも共益商社書店（東京）刊。

3. 各章における問題と対策

3.1. 第1章「高千穂」

第102小節, 合唱テノール, 1拍目におけるCはC#の誤りであると考えられる。第108小節, 第2オーボエ, 最後の8分音符がGとなっているが, フルート同様Aに変更した。第109小節, ピアノ, 2拍目の4分音符にスラッシュが付されているが明らかに不要である。第110小節, コントラファゴット, 1拍目がDとなっているが, 他のパートに倣ってD♭とした。第115小節, 第2フルート, 1拍目のGはFでないと不自然である。第116小節, 第1および第2トロンボーン, 一見すると激しい不協和音の原因となりそうであるが, *tutti*で*crescendo*する箇所でもあることから, クラスター的な効果を狙ったものであると考えられるので変更はしない。実際の演奏においても, 第117小節の*fermata*に向かって深まっていくような響きが得られていた。



譜例1. 第1章「高千穂」第112-117小節 トロンボーン⁵

第118小節から4分の4拍子に戻るが, テンポが明記されていない。第61小節以降継続していた4分音符=69から, 冒頭と同じ4分音符=60へと戻すのが自然である。同様に, 第128小節においてもテンポ表示が欠落している。この箇所では, 先に現れる4分の3拍子のときと同じく, 4分音符=69で演奏して構わないだろう。第141小節, コントラファゴットがオクターブ上行という不自然な動きをしているが, この小節における3拍目のGは, コントラバスをはじめ他の低音パートに倣い6度下のB♭として問題ないものと考えられる。

3.2. 第2章「大和思慕」

第29小節, 第2ヴァイオリンにおいて総音価が不足しているが, 4拍目に現れる8分音符のGは, 実際には4分音符で奏されるべきである。同じ小節の4拍目からヴィオラが出てくるが, これを全員で弾くと弦楽器セクション内のバランスが悪くなることは明らかである。このため, ヴァイオリンなどに合わせて, 1プルトで演奏する指示が必要であろう。また, 同じ箇所において, *arco*の指示および強弱記号(*mezzo piano*)も欠けている⁶。

第38小節, 第3ホルンの3拍目から4拍目にかけてタイがあるが, ヴィオラの上のパートに揃えて4拍目で打ち直すのが自然だと思われる。第45小節1拍目および46小節1拍目の第2ホルンに現れるB♭は, いずれも本来はB♯のはずである。

⁵ 信時潔『交声曲 海道東征』(東京: 共益商社書店, 1943), 13.

⁶ 譜例2.

譜例2. 第2章「大和思慕」第22-32小節 第1 ヴァイオリン、第2 ヴァイオリン
およびヴィオラ

3.3. 第3章「御船出」

第9小節、第1および第2トランペット、それぞれにF#が1度ずつ出てくるが、いずれもF#でなければ和声的におかしい。第18小節、第1および第2クラリネット、C#が合わせて3回現れるが、全てC#の誤りである。また、同じ小節の4拍目で第2クラリネットに書かれているF#も、F#の誤記だと考えられる。第19小節4拍目、第2ファゴットのB#は、チェロと同じくB#がよいであろう。さらに、第20小節、第1ホルンと第2ホルンの記音における「#」と「b」が逆になっている。すなわち、本来の実音は、第1ホルンがE、第2ホルンがD#である。第23小節においても、第2ヴァイオリンのGに「#」の付け忘れが見受けられる。

第28小節から拍子とテンポが変化する。ここでは、新しいフレーズのアウトタクトである8分音符のテンポをどう扱うか、ということが問題になる。スコア上、「Moderato 4分音符=104」は拍子の変化と同時に開始するように書かれているが、第164小節に現れる同様のフレーズにおいては紛れもなく4分音符=104で演奏するので、それに合わせて第28小節のアウトタクトも変化した後のテンポを採用するほうが無難だろう⁷。

第32小節、ヴィオラ、上のパートに次小節へかかるべきタイが欠落している。第36小節、コントラバス、4拍目にDが現れるが、チェロと同じくF#でよいであろう。第56小節、ヴィオラ、4拍目裏に出てくるG#はG#の誤りである。第72小節、第1ホルンと第2ホルンの記音における「#」と「b」が逆である。すなわち、実音は、第1ホルンがE、第2ホルンがC#となる。第96小節、ヴィオラ、4拍目のG#はAでなければ不自然である。第123小節、合唱ソプラノ、1拍目のDには本来あるべき「#」が付されていない。

⁷ 譜例3.

第142小節、チェロの最初の2音、すなわちC#とAは、今回の演奏においてはB \sharp とGに変更した。チェロ奏者からの指摘を受けて対処したものである。第156-157小節のヴィオラに現れるDは、それぞれEとD#に置き換えなければ不協和音が生じてしまう。第161小節でも第1ホルンの記音に「#」が欠けているが、本来の実音はB \sharp のはずである。第185小節、ファゴットおよびコントラファゴットは全休符となっているが、実際には第49小節と全く同じ音符によって埋められることが想定されていたであろう。

第206小節、オーボエおよび合唱テノール、それぞれに出てくるG#はG \sharp の誤りである。第209小節、第2クラリネットにG#が書かれているが、ヴィオラと同じG \sharp へ変更し、ここで鳴る和音の第7音として機能させる意図であったものと解釈した。第216小節、第2ホルンの4拍目にも「#」が欠けているが、本来の実音はC#である。

譜例3. 第3章「御船出」第24-32小節 木管および金管楽器⁸

3.4. 第4章「御船謡」

第27小節、ピアノ、最高音として書かれているB \sharp はB \flat の誤りである。スコアにおいて小節番号「40」と示されている小節が、実際には第41小節であるため注意を要する。第49小節は、楽譜通りに音を出すと前後の音楽にそぐわない不快な響きとなる。そのため、今回の演奏においては、第2オーボエのGをG#に、第1クラリネットのFをEに、それぞれ修正して対応した。

第65小節、コントラバス、最後から2つ目の8分音符のみチェロに合わせてAからGに変更すべきであろう。第68小節、ヴィオラ、下のパートの4拍目にbが欠けており、実際はA \flat で

⁸信時, 28.

なければおかしい。第69小節においても、ピアノの4拍目の最低音にbが付されていないが、実際にはEbである。第75小節の第1ホルンに出てくるAも、本来はAbである。また、第82小節4拍目および第83小節1拍目のヴィオラに現れるBbは、いずれもB♯でなければ和声的な不具合が生じる。

第104小節、フルート、1拍目裏の8分音符は、テノール・ソロに合わせてCを吹くべきである。続く第105小節では、チェロが8分音符のFを2回鳴らす、いずれもコントラバスと同じくEを弾くのが自然だと考えられる。さらに、第124小節からの4小節においても、コントラバスパートには書かれていない*pizz.*を書き足し、チェロとの乖離を回避した。

第157小節、ファゴット、Dが2回出てくるが、1回目のみCの誤りである。第166小節、イングリッシュホルン、スコアでは全休符となっているが、1拍目に8分音符のGが鳴らされるべきだろう。残りの1拍半は休符で埋める。本章の終盤、小節番号「220」と示されている小節が、実際には第221小節であるため注意しなければならない。

3.5. 第5章「速吸と菟狭⁹」

第56小節、合唱第2ソプラノおよびアルト、全休符となっているが、実際には全て4分音符で、第2ソプラノがE、A、アルトがC、Cを歌うべきである。その際、歌詞の割り振りは第1ソプラノに準じる。第66小節、合唱第1ソプラノ、1拍目裏の8分音符がB♯となっているが、これをCに変更した。フルートおよび第1ヴァイオリンの旋律に揃えるためである。第72小節、第2フルート、1拍目にDが書かれているが実際にはD♯であろう。同様に、第77小節、合唱第2ソプラノの2拍目においても、Dに「♯」が欠けている。第80小節、第2ホルンの2拍目にも「♯」の付け忘れがあり、本来は実音B♯であったものと考えられる。

第113小節には2つの誤りが見受けられる。1つは第1フルートにおいて、付点4分音符のEが欠けて全休符となっている点であり、もう1つは、チェロの1拍目、下の音は前小節と同じくAであるべきだが、これがGとなっている点である。第130小節、チェロ、最後の8分音符がCとなっているが、B♯に変更し、第2ファゴットと一致させるのが望ましいだろう。

第137小節においては、印刷が不鮮明であるため、ヴィオラの2拍目の音を判別するのが困難である。スラーが終わっている位置や、当該箇所和音を考慮して、下の音の2拍目表は8分音符のB♯であると判断した。上の音、下の音ともに、2拍目裏は8分休符が書かれていたものと考えられる。第147小節、第1ヴァイオリン、2拍目表は8分音符のAとなっているが、B♯の誤りだと思われる。音価についても、第1クラリネットに合わせて4分音符とすることも考えられるが、次小節への準備を意図している可能性がある2拍目裏の8分休符は残すこととし、B♯に変更した音は8分音符のままとした。

第167小節、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリンおよびヴィオラの2拍目裏において、8分音符の上に「V」が付されており、一見アップボウを指示しているように思われる。しかし、同じ小節の木管楽器では「V」が2拍目表と2拍目裏の間に書かれており、ブレスの指示であることが明らかであるため、弦楽器における「V」もフレーズの切れ目を意図していたものと判断し、「V」を削除した上で、2拍目表と2拍目裏の間に「,」を挿入することとした¹⁰。

⁹読みは「はやすいとうさ」。

¹⁰譜例4。

164

170

FL

Fl.

Sax.

Cl.

Bsn.

C. Bsn.

Horn

Trp.

Tbn.

P.

I. VI.

II. VI.

Cello

C. B.

CHOR.

エー・エー・シヤ エー・エー・シヤ エー・エー・シヤ エー・エー・シヤ

E - e - si - ya, o - si - ya, E - e - si - ya, o - si - ya.

170

譜例 4. 第 5 章「速吸と菟狭」第164-171小節¹¹¹¹信時, 92.

3.6. 第6章「海道回顧」

第17小節の合唱アルトおよび第18小節の第2ヴァイオリンにそれぞれ1音ずつF#が現れるが、いずれもF×(ダブルシャープ)の誤りである。公演に向けたリハーサルで、第20小節におけるチェロとコントラバスの動きが微妙に異なるため、違和感があるとの指摘がチェロ奏者から出された。オーケストレーションや合唱バスの進行を考慮して検討した結果、チェロの動きをコントラバスに揃え、2拍目裏のF#を4度上のB \natural に変更することとした。この変更は、同じ音型が現れる第94小節においても採用した。



譜例5. 第6章「海道回顧」第19-22小節 チェロおよびコントラバス¹²

第23小節、イングリッシュホルン、全休符となっているが、前小節の第1括弧内と同様にD#とした。但し、音価については、第1括弧で出てきた際の付点2分音符ではなく、ヴァイオリンや合唱などに倣って付点のない2分音符とし、残りは2分休符で埋めた。

第48小節においても、それまで同じ動きをしていたチェロとコントラバスが突如、一時的に異なる動きに変わり不自然であるとして、両パートの奏者から意見があった。検討したが、特に和声的な問題が生じているわけではないので、今回はスコア通りに演奏することとした。



譜例6. 第6章「海道回顧」第42-48小節 チェロおよびコントラバス¹³

第93-94小節、イングリッシュホルン、それぞれ全休符となっているが、第19-20小節と同じ旋律が想定されていたものとするのが自然である。強弱記号についても、*mezzo forte*のまま構わない。第94小節、合唱テノール、4拍目裏のB \natural は不自然な非和声音であるため、2度下のA#に置き換えて対応した。第100小節、コントラバス、3拍目表のB \natural は、同じタイミングで奏されるチェロに合わせてA#に変更すべきであると判断した。

スコア108ページの左端、楽器名に「Trp. C」とあるが「Trp. E」の誤りである。第113小節の3-4拍目において、イングリッシュホルンのみに、他の木管楽器や合唱と異なるリズムが与えられており違和感があるが、実際の響きを確認してもこれは明らかに不自然であった。そこで、元は2つの4分音符であったところ、オーボエなどと同様のリズム、すなわち付点4分音符と

¹²信時、96.

¹³Ibid.、98-99.

8符音符に変更した。

譜例 7. 第 6 章「海道回顧」第 112-118 小節 フルート、オーボエ、イングリッシュホルン
およびクラリネット¹⁴

3.7. 第 7 章「白肩津上陸¹⁵」

第 9-10 小節、第 2 ホルン、C に「#」が欠けているが、実際には前小節と同じく C# である。第 17 小節 3 拍目、*pizz.* を継続しているチェロに *tenuto* が要求されるという、非常に珍しい譜面となっている。*Tenuto* の指示が誤記である可能性も考えられるが、今回の演奏では「長めの *pizz.*」を奏することで対応した。

譜例 8. 第 7 章「白肩津上陸」第 8-24 小節 チェロおよびコントラバス¹⁶

第 22 小節、コントラバス、1 拍目に E が書かれているが、チェロに合わせて D# に変更した。第 44 小節の第 1 ヴァイオリンパートと、それに続く第 45 小節の第 3 および第 4 ホルンパートにおいて、それぞれ不自然な位置に *rit.* および *a tempo* が表記されていたため、いずれも削除した。

第 76 小節、ヴィオラ、上の音には調号が有効で A# となっているが、A# としなければならない。第 105 小節、男声合唱下の段、上のパート、3 拍目の G# は 2 度上の A に変更し、続く 2 度下の G# に向かう第 7 音として機能するものと捉えたほうがよいだろう。

第 124 小節、第 1 ヴァイオリン、最後の 8 分音符に「#」が欠けている。実際には E# を弾い

¹⁴ 信時、108.

¹⁵ 読みは「しらかたのつじょうりく」.

¹⁶ 信時、110.

て、次小節1拍目のF#へと上行しなければならない。第135小節、ヴィオラは*divisi*となっているが、上のパート同様、下のパートにもスラッシュが必要であろう。第153小節の途中から始まる *poco rit.* がどこで終わるか明示されていないが、第145小節の1拍目に *a tempo* を設定するのが適当だと考えられる。第145-146小節、コントラファゴット、付点2分音符と2分音符という2つのFが連続して奏されるように書かれているが、ファゴット同様、これらはタイで結ばれても問題ないであろう。

第161小節、第2フルート、「 \sharp 」の付け忘れがあり、実際にはG \sharp でなければならない。同様に、第165-166小節の第1フルートにおいても、「 \sharp 」を付してA \sharp とすべきである。一方、第165-167小節の第2ヴァイオリンは*divisi*であるが、下のパートにもトレモロ記号を書き足し、第1ヴァイオリンやヴィオラとの整合性を保たなければ不自然である。第176小節においては、第2ヴァイオリンに出てくる2つの2分音符が、それぞれ2度低く書かれている。本来はDおよびCであるはずであり、ヴィオラと共に順次下行をもって本章の終結へと向かうものである。

3.8. 第8章「天業恢弘¹⁷」

第57小節、第2ヴァイオリン、下のパートにトレモロ記号が欠けている。第1ヴァイオリンにおいて、第78小節3拍目の2分音符から次小節1拍目の4分音符は同音(G)であるが、タイで結ばれるのが自然であろう。第81小節、強弱記号がヴィオラのみ *mezzo piano* となっているが、他のパートに揃えても問題は生じないため、*piano*に変更する。

第91小節、ピアノ右手、3拍目の4分音符にスラッシュが付されているが、これは不要である。第93小節、第2オーボエ、3拍目裏のGは唐突で不自然であり、3拍目表と同じAで構わない。同じく第93小節、合唱アルト、2拍目の表裏がいずれもFとなっているが、解釈不能な非和声音である。2度下のEに置き換えて対応した。

第100小節、ヴィオラ、下のパート3拍目表の8分音符がB \flat となっているが、Cの誤りであると考えられる。チェロパートにおいて、第108小節3拍目と次小節1拍目は同音(D)であるが、同じ動きをしているファゴットに合わせてタイで繋げるほうがよいと判断した。同様に、第111小節のヴィオラにおいても、ファゴットに揃えて、2拍目裏と3拍目のB \sharp にタイを掛けた。

第119小節、第2クラリネット、1拍目の2分音符に「 \sharp 」が欠けているが、本来は実音B \flat であるものと思われる。第120小節、第2ファゴットは全休符となっているが、実際には1拍目に2分音符のD、3拍目に同じく2分音符のEが奏されるべきである。これらの音は、第1章第125小節を参照して決定した。同様に、第129-130小節においても、第1および第2ファゴットの音符が欠落している。この箇所については、第1章第134-135小節の音符をそのまま演奏することで対応できる。

第129小節、ヴィオラ、3拍目のAはA \flat の誤りである。第135小節、ピアノ右手、最後の8分音符の和音において、最高音とその次に高い音が、本来よりも3度高く記譜されている。FとCが書かれているが、それぞれD、Aでなければならない。続く第136小節においては、第

¹⁷読みは「てんぎょうかいこう」。

3ホルン1拍目の2分音符に「#」が欠けており、実際に奏されるべき音は実音B \sharp である。第138小節では、第1ファゴットと第1トロンボーンが同じ音型であるにもかかわらず、2拍目裏から3拍目表にかけてのタイの有無において不一致が見られる。今回は、いずれにもタイを付すことで整合性を保った。

4. おわりに

以上、信時潔作曲によるカンタータ『海道東征』の、現在一般に入手可能である唯一のフルスコアについて、演奏する際の譜面上の問題および2015年11月の公演において実際に採用された解決案を列挙した。全体的な傾向としては、臨時記号等の欠落をはじめ、単純なミスであろうと思われる誤りが多かった。作曲家の意図を最大限に汲み取った校訂版が世に出され、作曲された経緯のみをあげつらって我が国の西洋音楽史から忘れ去ることなく、作品の真の価値が広く認識される日を待ち望むところである。

* * *

この度の演奏会の主催者である産経新聞社様、演奏を担当された指揮者の北原幸男氏および大阪フィルハーモニー交響楽団様には、リハーサルから本番を通じて大変お世話になりました。また、信時裕子氏には貴重な楽譜をお譲りいただき、村上泰裕氏には演奏の準備に際しご高見を賜りました。心より感謝申し上げます。

(2016年4月12日受理)